

香取遺産

vol. 236

大六天遺跡^{だいろくてん}

大六天遺跡は、小見川の一分目に所在した古墳時代から中世の遺跡です。発掘当時、遺跡の大半は失われていましたが、約1万2000㎡を調査しました。

遺跡は利根川を望む台地の先端を占め、昔は眼下に香取の海が広がり常陸国や鹿島灘を一望できた場所です。香取の海を行き来する舟もつぶさに把握できたことでしょう。そのためか中

世の戦乱期には城館が築かれませんでした。その際の土木工事により古い時代の遺構や遺物の多くが消失しましたが、平安時代までは集落が展開していました。

土木工事は、平坦面^{たん}の削り出し、堀の掘削や溝を伴う柵の設置、土塁の構築、斜面部の整形などです。計画的に区画し、居住区、物見台、広場を配置したことが分かります。居住区は、広く削り出した平坦面の中央で

平坦面との境に段差を付け、防御性を高めています。斜面部の整形はまるで腰曲輪^{こしるわ}のようです。

城館跡の年代は、14世紀から16世紀です。特に15世紀の遺物が多くあることから、この頃を最盛期として16世紀になると徐々に縮小し、以降は一部の区画が埋葬の場となり終焉^{しゅうえん}を迎えました。

14世紀は鎌倉幕府が滅亡し、南北朝の内乱期が始まります。室町幕府は関東を管轄する鎌倉府を置くなど、情勢が大きく動いた時代です。一方、香取神宮と千葉一族との間で社領をめぐり、鎌倉府も巻き込んだ騒動もありました。

15世紀に入ると、鎌倉公方^{くぼう}とその補佐役である管領^{かんれい}との対立が続き、1454年には、鎌倉公方が管領を殺害し、関東の戦国時代の始まりである享徳^{きやうとく}の乱が勃発しました。

このような不穏な空気を背景に、防御性を高めた構^{かまえ}に発展させたのでしょうか。



▲調査地空中写真(南東より)

す。建物跡が複数あり、少なくとも二時期の変遷が確認できます。物見台は、居住区の南に隣接し、一段高くなっています。櫓^{やぐら}などの跡は見つかりませんでした。広場は作業空間と考えられますが、合戦時には兵だまりなどにも使用したのでしょうか。また、土塁と斜面部の整形は、